



### 節分によせて

副校長 岩間 洋

2月3日(土)は節分です。そして4日(日)は立春。暦の上ではもう春になりますが、まだまだ寒い日が続きます。

「立春」は「春の気立つをもってなり」とされ、この日を過ぎると少しずつ寒さがゆるみ始め、春の気配が忍び寄ってくると言われています。日ごとに日没時間が遅くなり、気温の上昇に先駆けて、光の中に春を見る季節です。

「節分」という言葉は「季節が分かれるとき」という意味で、本来は立春、立夏、立秋、立冬などの前日はすべて節分と言い、1年に4回あったようです。それがいつの頃からか、立春は1年の始まりとして、特に尊ばれたため、立春の前の日を「節分」と言うようになりました。

「節分」といえば豆まき。もともとは中国から伝えられた風習だそうです。

中国では古来より、季節の変わり目には邪気(鬼)が生じると考えられており、それを追い払うための悪霊払いの儀式が執り行われました。その風習が伝わり、我が国でも宮中を中心に「追儺(厄除け)」の儀式が行われるようになりました。これが寺社に伝わり、やがて民間にも広まるようになったそうです。

この豆まきには、春を迎えるにあたって邪気や災難を払い、無病息災を願う意味合いがあります。調べてみると豆には「魔目(鬼の目)」という意味と「魔滅(魔を滅する)」という二重の語呂合わせがあり、京都の鞍馬山に鬼が出たとき、毘沙門天のお告げで鬼の目に豆を投げつけて退治したということに由来するようです。

豆をまき、自分の年齢の数だけ(あるいは年の数より1つ多く)食べると体が丈夫になり、風邪をひかないという習わしがあります。

豆まきの豆は煎った大豆が使われますが、これは、厄災を負って払い捨てられる物であるため、まいた豆から芽(魔目)が出ることを避けるためであるそうです。豆をまく際のかけ声は「鬼は外、福は内」が普通ですが、地域によってはいろいろなバリエーションがあるようです。鬼を祭神、もしくは神の使いとしている神社では「鬼は内」としているところもあります。

「鬼」は「悪いもの」「こわいもの」の代名詞と考えられます。「鬼」は、昔から昔話や「鬼に金棒」「鬼の目にも涙」等の格言、ことわざにも数多く登場し、日本人の暮らしの中に深くとけ込み、様々な教訓を与えてくれています。

2月3日の節分の日には、ご家庭でも「豆まき」の行事に取り組んでいただき、「鬼」や、日本の風習についてご家族で話し合ってもらいたいと思います。

私たち人間の心の中にも鬼が棲むと言われています。欲望や嫉妬、憎しみの感情等です。節分の日を機会に、私たちの心の中に巣食う小さな鬼を退治し、清々しい気持ちで1年を過ごしていきたいものです。

今年度の小学校生活もあと2か月足らずとなりました。本校では次年度の諸計画等について調整を進めているところです。今年度の教育活動を真摯に見直し、保護者・地域の皆様からいただいた学校評価をもとに、改めるべきところを改め、本校の子どもたちにとってよりよい教育活動を実施できるよう努めます。

これからの2か月間は、卒業や進級に向けて意欲的に取り組み、年度末にはどの子も「楽しい一年だった」と思えるように、自分の力を十分に発揮してほしいと願っています。私たち教職員も、一日一日を大切にしていきたいと考えていますので、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。